



ジブチ共和国マルカジ難民キャンプ

## 難民キャンプの子どもたちを守る活動

<紛争地の子どもたちの事業：担当スタッフからのレポート>

アフリカ東部、ジブチ共和国のマルカジ難民キャンプ。ここには、紅海の対岸にあるイエメンで去年3月以降激化した内戦から逃れてきた人々が暮らしています。アイキャンは、この場所で、子どもたちに安心して遊べる場所を提供し、心の傷を癒してもらおうと、今年3月から「子どもの広場」を運営しています。

子どもたちは、毎日夕方1~2時間のこの活動を心待ちにしており、アイキャンスタッフを見かけると駆け寄ってきて、朝から口々に「今日は何をするの?」と聞いてきます。活動開始当初は、順番争いなどの小競り合いが日に10件前後見られましたが、皆で決めた約束を守り、列を作って長縄の順番を待つなど、社会性も徐々に身に付いてきて、最近では言い争いも1日1~2件にまで減少しました。こうしてルールを守りながら仲良く遊べるのも、心が安定してきたからであると言えます。活動初期には、好きなものを描く活動にも関わらず、爆撃の様子を描く子もいましたが、5月末に行われた、テーマ自由のお絵描きの時間には、カラフルで明るい絵だけが並びました。絵は子どもたちの心の状態を素直に表現します。

「子どもの広場」の重要性は、保護者たちからも頻りに聞かれます。保護者たち自身、子どもの話を聞くようにしたり、一緒に遊んだり、制限の多いキャンプ生活の中で親としてできる限りの努力をしています。それでも、今でも飛行機の音に戦火を思い出して怖がる子どもや、亡くなった親戚を思い夜中に目覚めて泣き出す子どももいると言います。長引くテント生活の中、「子どもの広場」が子どもたちにとって息つく場所にはなれても、それだけで心を完全に癒せるわけではありません。子どもを最も身近で守れるのは、保護者たちです。活動を通じて、「子どもの広場」は、単に子どもたちが集まる場ではなく、大人たちがキャンプの子ども全体を守っていくという意識の醸成にも繋がってきていると感じています。今後は、親子一緒にイベントや親の集いなど、保護者も巻き込んだ活動を強化しています。私たちは、子どもたち自身、そして、自分たちの子どもを守ろうとする大人たちとともに、灼熱のアフリカの難民キャンプで、今後も活動していきます。

認定NPO法人アイキャン

〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須3-5-4 矢場町パークビル9階 TEL/FAX: 052-253-7299 メール: info@ican.or.jp

ホームページ <http://www.ican.or.jp> フェイスブック <https://www.facebook.com/ICAN.NGO>



ICAN 日本事務局

藤目春子(ふじめはるこ)

～プロフィール～

ピッツバーグ大学公共政策・国際関係学修士。国連、NGO、JICA等で、主に住民参加型の教育・社会開発事業に従事。アフリカに在任8年を経て、2016年2月より現職。

### Project Site



【編集者から一言】 マンスリーパートナーになっていただくことで、ジブチでの活動も応援していただけます。詳細は上記HPへ。

# Close up

## I. 危機的状況にある子どもたちと「ともに」行う活動

全10事業の中から、今回はこちらの2つをご紹介します。

### 紛争地の子どもたち 5月19～30日/イエメン共和国タイズ州 3,500以上の世帯に物資を提供



内戦の被害が大きいタイズ州において、国内避難民を中心とする1,290世帯に、小麦粉、米、砂糖、油、ミルクの基礎食糧セットを、2,389世帯にタオル、石鹸、洗濯洗剤、女性用品の衛生用品セットを提供

しました。物資を受け取った人からは、「ICANからの物資にとっても感謝しています」、「これで今日からご飯が食べられます」、「ぜひ継続してほしいです」などの声が寄せられました。

### 先住民の子どもたち 5月13～14日/ミンダナオ島ブキドノン州 先住民からみた「よい教育」



教育省・国家先住民委員会・教師・学校運営者・先住民リーダー計50名に対し、「先住民教育方針」に関する研修を実施し、先住民の子どもの教育環境を良くするためのそれぞれの役割について話し合いました。

先住民の学校を運営しているネルソンさん(45歳)は、「先住民の子どもたちが教育に関心を持ち、将来地域に貢献できるような人材になるよう、教師を指導したい」と話しました。

## II. できること (ICAN) を増やす活動

全7事業の中から、今回はこちらの2つをご紹介します。

### 国際理解教育事業 5月29日/名古屋 フィリピンフェスティバル

中部フィリピン友好協会主催の「名古屋フィリピンフェスティバル」に日本事務局職員が参加し、講演会「異なる文化の中で共に生きること」のゲストスピーカーとして、アイキャンの活動や相互理解についてお話ししました。



中部地域のフィリピン人、日本人、その他国籍の来場者からは、「異なる者同士がともに活動する素晴らしさを痛感した」「今日来られなかった人にも是非伝えたい」との声がありました。

### NGO 相談員事業 5月19日/名古屋 NGO への理解と行動を広める

NGOについてグループ学習を行っている大学生6名を受け入れ、NGOとは何か、寄付の流れ、学生にできることは何か、といった質問にお答えしました。相談者からは、「とても丁寧に分かりやすく答えてもらった」「募金活動など身近にある第一歩を踏み出そうと思った」等の感想を頂きました。アイキャンは、今年度も外務省から「NGO相談員」を受託しており、様々な質問、相談を受け付けています。



## 今月の Topic

### 夏のツアー、申し込み受付開始!



夏のスタディツアー、ボランティアツアーの日程が決まり、チラシが完成しました! 詳細はホームページより、資料を請求ください。

【ボランティアツアー】児童養護施設「子どもの家」で過ごす7日間! (日程8/2~8)

【スタディツアー】路上やごみ処分場で交流する5日間! (日程A: 8/17~21、B: 8/31~9/4、C: 9/7~11)

## 今月の ICAN なる人

5月 2015年版開発協力白書 ミンダナオでの平和構築事業 5月1日 まにら新聞 チャリティコンサートの収益を寄付

## 今月の Media

◎内川さん、マンスリーパートナーとして、今後もよろしく願います!

### マンスリーパートナー 内川俊大さん 「ツアーで痛感した、教育の貴重さ」

インタビュー: 6月21日

私は、メディア等で取り上げられ、大きな社会問題でもある貧困問題の現状を、自分の目で見て知りたいと思っていたところ、高校の同級生の紹介でアイキャンを知りました。昨年スタディツアーに参加したその友人からは、「実際に活動しているスタッフ自身が同行し、非常にいい経験になったので、ぜひ行くべき」と強く勧められ、今年の3月に参加しました。

ツアーでは、都市の繁栄や子どもたちの笑顔、人々の気さくさなども印象的でしたが、その一方で、家庭訪問で知った教育の現状が特に印象に残っています。その家庭の親は子どもに教育を受けさせたいと言い、子どもたちも教育を受けたいと思っているのに、受けられていないという現状がそこにはありました。日本では、教育を受けるのが当たり前の環境であるがゆえに、勉強なんか楽しくないからやりたくないと感じる学生もあり、大きな問題の一つだと思います。でも、目の前にいるフィリピンの人々にとって、教育は本当に必要とされているのだと痛感し、その貴重さを改めて知りました。

帰国後、小さなことでも自分にできることを考えた時に、アルバイトで稼ぐお金の一部を、彼らの状況を改善するために使えたらと思い、マンスリーパートナーになりました。SNSを活用して、自分の感じたことを発信していくのも大切だと考えています。また、以前やっていた個別指導塾の講師を再開し、日本においても教育に貢献できればと考えています。

